

令和6年度 外国語部会研究計画

1 研究主題

コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育

2 研究主題設定の理由

現代は予測困難な時代と言われ、近年の感染症の拡大及び国際情勢の不安定化はまさにその象徴である。また、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく急速に変化している。このような時代において、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成しながら新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。また、令和5年6月16日に閣議決定された「教育振興基本計画 第4期」において、「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」が掲げられた。ウェルビーイングとは、身体的・精神的・社会的によい状態にあることと定義されており、将来にわたる持続的な幸福を含む概念である。学校で教育活動全体を通じて向上させた子供たちのウェルビーイングが、家庭や地域全体へ広がり、循環していく姿の実現が求められており、子供一人一人のウェルビーイングの向上が、持続可能な社会の創り手の育成につながる。このことから、社会の持続的な発展と、個人と社会のウェルビーイングの相互循環を実現していくためにも、学び続ける人材の育成が一層重視されている。今後は、これまでの取組を継続する中で、ともに生きる「共生社会」の実現に向け、多様性を尊重することを学びながら、誰もが違いを認め合い、学び続ける人材の育成を図っていききたい。¹

令和2年度より全面実施となった学習指導要領では、これからの時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育成するために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を子供たちと共有しながら授業の創意工夫や充実を目指すよう、全ての教科等において目標及び内容が次の三つの柱で再整理されている。

- ① 何を理解しているか、何ができるか（知識及び技能）
- ② 理解していること・できることをどう使うか（思考力、判断力、表現力等）
- ③ どのように社会・世界とかわかり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

そして、全ての教科等において、これらの目標に準拠した観点で評価をするとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が推進されている。

外国語教育に関しては、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力が、生涯にわたる様々な場面で、これまで以上に必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。この課題を踏まえて、小学校において子供たちにコミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育むこととなり、そのためには「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることが重要である。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語でコミュニケーションを行う中で物事を捉える視点や考え方のことである。外国語でコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり外国語やその背景にある文化を理解したりするなどして他者に十分配慮することが重要となる。さらに、外国語で表現し伝え合うためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成、再構築することが大切になる。この「見方・考え方」を働かせ、中学年では、「聞くこと」「話すこと」の言語活動を通じたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、高学年では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の言語活動を通じたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成していくことになる。ここでいう言語活動とは、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動のことであり、言語材料について理解したり練習したりするための活動とは区別されている。こうした外国語教育の目標達成のために示された、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」に関する具体的な目標に向けて実践を進める必要がある。

今後は、言語活動を通じた授業展開やデジタル教科書を含むICTの効果的な活用、学習評価等について実践・研究を進め、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目指し、多様な他者と協働しながら学び続ける力を身に付けた子供を育成したい。本県の研究指定校等の実践を参考に、中学年の外国語活動（活動型）、高学年の外国語科（教科型）それぞれの目標・内容を再確認し、資質・能力の育成を目指して、これまでの取組を継続しながら更なる実践を重ねることが必要である。そうすることが、ひいては、ともに生きる「共生社会」の実現に向けて子供たちのウェルビーイングの向上につながると考える。そこで今年度も引き続き、研究主題を「コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育」と設定した。

3 研究主題について

コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力とは、外国語活動・外国語科で育成すべき資質・能力である。指導者は「外国語によるコミュニケーションにおける、見方・考え方」を十分に理解した上で、その見方・考え方を働かせることができるような目的や場面、状況の設定を行い、言語活動を通して「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」それぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要がある。そのためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現が不可欠であり、その実現に向けては、新たに学校における基盤的なツールとなる ICT も効果的に活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない「個別最適な学び」と、異なる考えが組み合わさり、よりよい学びを生み出す「協働的な学び」の一体的な充実が求められる。

中学年では、「聞くこと」「話すこと」について慣れ親しむことを目標としており、初めて外国語に触れる段階であることを配慮し外国語を通してコミュニケーションを図ることや、世界には様々な言語や文化があることを知ることを通して実感させたい。音声や基本的な表現についても、実際のコミュニケーションの場面で使いながら体験的に慣れ親しませ、身近で簡単な事柄について自分の考えや気持ちを伝え合うよう工夫したい。子供が持っている表現が限られていることを十分に考慮した上で、子供自身が適切な表現を選び、自分の考えや気持ちを伝えられるよう配慮する必要がある。そのためにも、子供が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて子供たちの主体的に学習に取り組む態度の育成を目指すことが大切である。

高学年では、中学年での指導を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」については定着が求められる。さらに、「読むこと」「書くこと」が加わり、これらに慣れ親しませること目標としている。また、日本語との音声の違いにとどまらず、文字や言語の働きなどについての気付きを生きて働く知識として理解し、外国語でコミュニケーションを図る際に活用することが求められている。そうしたことを踏まえ、コミュニケーションの際には、身近で簡単な事柄について、推測して聞いたり、表現を選択して話したり、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順や語と語のスペースなどを意識して書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが重要となる。なお、実際の指導に当たっては、外国語活動同様に、子供の実態に合わせた題材や活動内容を考えたり、相手意識や目的意識、必然性を明確にもたせたりして外国語を学ぶ楽しさや、意義を実感させたい。「知識及び技能」を活用し、考えを形成・深化させる活動を繰り返すことで、子供たちの自信につなげ、主体的に学習に取り組む態度の向上を目指すことが大切である。活動型で培ったコミュニケーションを図る素地となる資質・能力の上に、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力をしっかりと育み、中学校外国語科の礎としたい。

4 研究の内容

(1) 実態に応じた年間指導計画や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

学習指導要領において、外国語活動及び外国語科では、それぞれの「目標」と「各領域別の目標」が示されている。これらは、中学年、高学年のそれぞれ2年間を通した目標となっているため、各学年の目標と各領域別の目標を学校の実態に応じて設定することになる。同時に、目標に応じて、学年ごとに領域別の評価規準を設定し、これらを受けて、単元ごとの目標と評価規準を領域別に定め、実践していくこととなる。設定した目標に従い、学年毎に年間指導計画を作成する際は、育てたい子供の姿を明確にするとともに、地域・学校の特色を生かし、子供の実態に応じた工夫が望まれる。また、他教科等との連携を図るなどカリキュラム・マネジメントの視点も重要である。

さらに、授業実践においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直すことが大切である。デジタル教科書などの教材や、ICT 等も効果的に活用しながら、子供たちが見通しをもって粘り強く学習に取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげたり、友達や教師、地域の人々や先哲の考え方などに関わることを通して、自己の考えを広げたり深めたりすることができるような「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業を展開していくことが求められる。

(2) 目指す資質・能力を育成するための言語活動

外国語教育において目指す資質・能力を育成するためには、言語活動の充実を図ることが大切である。つまり、言語活動を通じた授業展開が求められる。外国語学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、学びの過程全体を通して、知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され、目的・場面・状況に応じて思考・判断・表現することを繰り返すことで獲得され、学習内容の理解が深まるなど資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。そのため、実際に外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動は単元終末のみに行うのではなく、単元全体を通して繰り返し行っていくことが大切である。なお言語活動を行う際には、子供が個々の興味・関心や特性等に応じて学び方を選択し学習を進めること

ができる「個別最適な学び」の場と、多様な他者の異なる考え方に触れ、よりよい学びを生み出していく「協働的な学び」の場を意図的に設定し、それらが往還するような授業構成の工夫が重要である。

○ 「聞くこと」「話すこと」における言語活動

中学年において言語活動を充実させるためには、子供が興味・関心をもつ題材を扱い、聞く活動を十分に取り入れた上で、必然性のある体験的な活動を設定することが大切である。中学年で十分に聞いたり話したりする経験をしておくことが、高学年の外国語における五つの領域の言語活動につながるようになる。高学年においては、中学年の外国語活動での学びを生かして、「聞くこと」「話すこと」において定着が求められる。

それぞれの単元では、ゴールを明確にして、子供がその目的を達成するために聞いたり話したりし、修正を繰り返しながら語彙や表現への理解を深め、活用できるようにする。中間指導の際には、うまく伝わらなかった言葉や表現などを全体で共有し、既習の言語材料から使える表現を導き出したり、別の言い方を考えたりする時間をもつことが必要である。さらに、自分で学習方法を選択し、語句や表現を確認するなど、自ら学びながら自己調整につなげることができるような場を設定したい。

言語活動を充実させるための活動の一つとしては、Small Talk が挙げられる。研修ガイドブックによると、Small Talk を行う主な目的は、①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導すること、の2点である。² 指導者や子供が身近な話題について、自分自身の考えや気持ちなどをやり取りする中で、子供が現在学習している単元、及びこれまで学習した語彙や表現を繰り返し使用する機会を保障し、定着を目指す。なお、Small Talk の際には、子供の実態に合わせ、指導者同士、指導者と子供、子供同士等の段階を考慮して進めていく。また、自分の対話を振り返ったり、相手を替えて自己調整しながら繰り返したりすることも大切である。

「聞くこと」「話すこと」の言語活動では、「使いながら学ぶ 学びながら使う」という経験を積み重ねることで、子供たちに達成感を味わわせ、主体的な学びにつなげていきたい。

○ 「読むこと」「書くこと」における言語活動

子供が主体的に読んだり書いたりしようとする態度を育成するためにも、自分自身や友達のことなど、簡単で身近な事柄について、目的をもって読んだり書いたりする活動を取り入れることが大切である。同時に、子供が過度な負担を感じないように、スモールステップで学習を進めることが重要である。また、書くことについては、英語の語順に気付いたり、語と語の区切り等に注意して書き写したりすることができるよう配慮する必要がある。文字を扱う際には、音声中心の活動の中に文字に触れる場を設定する等、子供たちが文字に親しみ、読んだり書いたりすることに自然と気持ちが向かうような工夫が必要である。活動の意味や目的をしっかりと理解させた上で、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現について丁寧に指導したい。

なお、読むこと、書くことに関して、困難を感じる子供がいることも想定されるため、個に応じた教材の工夫や支援が望まれる。

(3) ICT 等の効果的な活用

学習指導要領（外国語活動・外国語）には、「児童が身に付けるべき資質・能力や児童の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、児童の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」と記載されている。³ 加えて、『「令和の日本型学校教育」の構築をめざして～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』にも、「ICT を利用して空間的・時間的制約を緩和することによって、今までできなかった学習活動も可能になることから、その新たな可能性を「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていくことが求められる」との記述がある。⁴ 文部科学省は、こうしたことを踏まえ、「外国語の指導における ICT 活用について」として次のようにまとめている。⁵

- ①【言語活動・練習】児童生徒の言語活動の更なる充実と指導・評価の効率化
- ②【交流・遠隔授業】遠隔地・海外とのコミュニケーションと災害など非常時への対応
- ③【コンテンツ・授業運営】興味・関心、学習の質を高める

上記のような活動を進めるにあたり、「GIGA スクール構想」により一人一台の端末が整備され、さらに学習者用デジタル教科書も加わった。これらを活用して、個々の子供が、自身の興味・関心や学び方に応じて、学習方法を選択し学びを進める「個別最適な学び」を保証したい。具体的には、言語活動においても、音声を録音したり、学習者用デジタル教科書でモデルとなる発表動画を視聴したりすること、または従来の紙の教科書で語句や表現を確認したりすることなど、子供が自己の課題に合わせて最適な学習方法を選択したり、学習進度を調整するなど自分で学び方を自己決定することができるような場を意図的に設定したい。また、指導者や子供同士との関わりはもとより、他の学校や海外の人など

と交流したり互いの情報等を共有したりすることが容易となることで、「協働的な学び」を発展させたい。これら「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた ICT の効果的な活用方法についての研究が求められる。

(4) 評価

○ 基本的な考え方

学習評価の基本的な改善の方向性として、次の3点が示されている。⁶

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われていたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

指導者は、学年や単元の目標を念頭に置き、その目標達成に向けて指導を行い、達成状況を評価する。つまり、目標と指導、評価の一体化が極めて重要となる。次に、今回の改訂で強調されていることが、評価の生かし方である。評価を単なる結果報告や児童生徒の序列づけに終わらせるのではなく、上の①②に示したように、児童生徒の学習改善や指導者の授業改善につなげていくことが大切となる。それは、学期末や学年末で行う総括的な評価だけでは実現しない。そこで求められるのが、指導過程で行う形成的評価である。指導者は、目標に向けた指導を行い、その達成状況について、常に、形成的評価等を通して把握し、評価したことを指導改善につなげたり、児童にフィードバックして学習改善につなげたりしながら、目標達成を目指したい。

こうした評価の捉え方について学校全体で共通理解を図り、何を、どこで、どのように評価するのかについて研究を進め、必要性・妥当性が認められないものは見直していく必要がある。その際には、記録に残す時期や場面を精選し、かつ適切に評価するための判断基準を盛り込んだ評価計画を立てることが重要である。

○ 内容と方法

学習評価の観点は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」である。どの観点も子供ができるようになってから評価することが大切である。つまり、目標に沿って指導し、指導したことについて評価するのである。

「知識・技能」では、英語の特徴やきまりに関する事項を理解しているかどうか、それらを実際のコミュニケーションにおいて、活用する技能を身に付けているかどうかを評価する。学習初期段階においては、努力を要すると判断される状況になりそうな子供を見出し、おおむね満足できる状況となるよう適切な指導を行うことが大切である。

「思考・判断・表現」では、子供がコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、既習語句や表現を使って内容を理解したり、自分の考えや気持ちを表現したりしているかどうかを評価する。そのため、学習過程において、普段から指導者と子供、子供同士で既習語句や表現を使って常にやり取りする場面を設定しておくことが大切である。

「主体的に学習に取り組む態度」では、子供が英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことの楽しさや言葉の大切さを実感しながら粘り強く学習に取り組み、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付けているかどうか、また、必要な場面で自ら英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているかどうかを評価する。したがって、挙手の回数など、形式的な側面で評価をするのではなく、学習過程において自己調整を行っている側面を捉えて評価することが大切である。つまり、本観点においては、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価することが求められる。よって、本観点のみを取り出した評価を行うことはない。さらに、学習活動を通して身に付けた態度を評価するため、単元の導入時に評価したり、1単位時間の授業の冒頭で評価したりすることは適さない。

上記の三つの観点の評価方法としては、従来の振り返りカードの分析や行動観察に加え、パフォーマンス評価（インタビュー、発表、ワークシートや作品等の記述）ペーパーテスト等が考えられる。多様な評価方法から子供の学習状況を評価できる方法を選択し、多面的・多角的に評価することが重要である。また、評価においても、タブレット端末を用いた動画撮影や録音、学習支援アプリ等を活用し、子供が自分の学びを振り返り自己調整につなげることができるような ICT 機器の効果的な活用が期待される。さらに、子供自らが自分自身の学びを振り返り、次の学びに向かう自己評価を加味しながら、適切に行うことが大切である。

(5) 接続と連携

学習指導要領の下では、小中高の目標や内容の系統性が図られた。小学校内では外国語活動と外国語科の接続が求められる。中学年では活動内容がどのように高学年の教科につながるかを意識して、高学年では、どのような活動内容を経て今に至るのかを理解した上で授業を進める必要がある。同時に、中学校との連携はこれまで以上に重要となる。小学校においては、中学校の授業内容にどのようにつながっていくのかを意識し、小学校での子供たちの学びの過程について中学校の指導者へしっかりと伝える必要がある。

子供たちの学びをスムーズにつなげ、学習内容の定着を効果的に進めるためにもグローバル社会の中で生きる子供たちの将来を見据え、共通の目的意識をもち、指導者が系統的な指導を続けることは大変重要である。まずは近隣の小学校間で、そして地域の小・中学校間で授業参観や研究会を通して情報交換や交流を行い連携を進めていきたい。さらに、学習指導要領が示す目標に沿った授業づくりについて各校が実践研究を進めるとともに、交流を続けることで互いの理解を深め、将来的にはそれらを共有し外国語教育における学校間の円滑な接続について検討していくことが大切である。連携は一朝一夕にできるものではないが管理職や教育委員会のリーダーシップの下、進めていく必要がある。

5 研究の進め方

- (1) 各郡市の実態に応じ、個人または協同で研究を進める。
- (2) 夏季研修会で実践的な研究を深める。 8月 6日 教育会館にて開催予定

引用・参考文献

- 国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 外国語・外国語活動】（令和2年6月）
- 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築をめざして～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月）
- 文部科学省：小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック（平成29年6月）
- 文部科学省：小学校学習指導要領解説 外国語活動編・外国語編（平成29年6月）
- 文部科学省：外国語の指導における ICT の活用について（令和2年9月）
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課：学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月）
- 文部科学省：「教育振興基本計画 第4期」（令和5年6月16日）

-
- ¹ 令和6年度徳島県小学校教育研究会 研究主題 P.6
 - ² 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック P.84
 - ³ 小学校学習指導要領（平成29年度告示）外国語活動・外国語 P.131
 - ⁴ 「令和の日本型学校教育」の構築をめざして P.19
 - ⁵ 外国語の指導における ICT の活用について P.6
 - ⁶ 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 外国語・外国語活動 P.5